

第26集

2004 親子で学ぶ平和学習資料

私の戦争体験

大分県 大分市 大分市立大分小学校
大分市立大分小学校 大分市立大分小学校
大分市立大分小学校 大分市立大分小学校



戦争は二度とおこしてはならない

堺市 杉浦 保孝（82歳）

昭和16年12月8日真珠湾攻撃（※①）から太平洋戦争が始まりました。私は12月1日和歌山歩兵第61連隊に入隊、6日真夜中に行動が始まりました。呉港で船に乗り、上海へ。そこは戦場です。前進部隊に東京の101部隊がおり、私たち新兵42名は、銃の扱い方もわからず古参兵（※②）が「頭を低く下げる姿勢をとれ」と大声で言ってくれました。足元にはブツツと、耳の所にはピューンと銃の音が絶え間なく聞こえました。

昭和17年1月南京陥落。私たち61連隊は南昌（※③）に向かって前進しました。南昌では永住のための宿営や他の建物、警備など、適任者がそれぞれ仕事を始めていきました。私たちは戦闘のできる軍人になるため6ヶ月間訓練を受け、「有終の美を」と訓辞をいただき、任務の重さを感じました。

昭和18年1月、錦江作戦に参加。途中夜中に敵襲に遭い、4時間程度川に入りました。朝方に友軍が応援に来てくれて、やっと川から上がることができましたが、寒さと気合が抜けたのと、バタバタと人が死んでいきました。4月に作戦は終了し、原隊に復帰しました。

同年5月に第二次錦江作戦に再び参戦。この戦闘で右肩胛部を負傷したものの、応急手当で続戦しました。部隊で治療を受けていたところを襲撃され2名射殺し、白兵戦（※④）となりました。敵の手榴弾で、右上腕と左手甲部を受傷しましたが、戦闘中のため野戦病院（※⑤）に行くこともできませんでした。

6月に野戦病院に入院。8月には征漢作戦に参加。この時は覚悟し、遺書を提出しました。その後も警備や作戦に参加しました。主力部隊は錦江作戦

※①真珠湾攻撃

ハワイ、オアフ島南岸のアメリカ海軍根拠地を1941（昭和16）年12月7日（日本時間8日）、日本海軍が奇襲した。太平洋戦争の始まり。

※②古参兵
古くから所属している兵員。

※③南昌

中国江西省の省都。1927（昭和2）年、中国共産党が武装蜂起を行い、後の紅軍成立の契機となる。1939（昭和14）年、日本軍が占領。



※④白兵戦

白兵（敵を斬り、または突き刺す兵器）を用いてする肉弾戦。

※⑤野戦病院

戦場の後方に設け、戦線の傷病兵を収容・治療する病院。

三次と同時に重慶作戦を連合で戦闘中、当隊は分隊毎に糧秣の調達、外敵の状況および偵察斥候（※⑥）などを命令され、任務遂行中にいろいろの事件を体験しました。強盗、強姦、放火、殺人、一般人への危害など、戦争は罪悪であり人間と人間の殺し合い、誠に殺伐な事と思います。

20年9月終戦の伝達があり、投降しました。21年6月、南昌より引揚船（※⑦）にて佐世保に無事上陸し復員解職しました。

勝ち戦のときは戦友の死体を捜しに行き、火葬してねんごろに冥福を祈り、遺骨を遺留品などと共に親元に送り届けられますが、負け戦ではそれもできませんでした。

戦争とは本当に二度とおこしてはならないと思います。

敗戦の苦難の中での出会い・再会

東大阪市 遠嶋 由美子（69歳）

夜中に騒がしい物音で目を覚ますと、布団の横に大きな革靴があり、ソ連兵が叔母に銃剣（※①）を突きつけて何か怒鳴っていました。叔母は「布団を被って」と叫び、私は布団の中で震えていましたが、寝てしまいました。朝になって叔母がお腹を数ヶ所剣先で突つかれ傷つけられ、時計やお金などを、掠奪されたことを知りました。これは、満州の奉天という町にある祖母の家で終戦のラジオを聞いて三日後の夜でした。

私たちは両親と私（9歳）、弟（8歳と3歳）、妹（5歳と1歳）の7人家族で、朝鮮の京城（※②）に住んでいました。学童疎開が始まり、父は、母の反対を押し切って「満州のほうが安全だ」と思い、祖母に4人を預けようと、母と1歳の妹を残し、4人を連れて行つたのです。ソ連兵が侵入した途端、女性はトラックに詰め込まれどこかへ連れ去られ、奉天の日本兵部隊

※⑥ 偵察斥候
ひそかに敵の様子を探るために、部隊から派遣する少数の兵士。

※⑦ 引揚船
第二次大戦後、国外から引き上げてくる人々のための艦船。

※① 銃剣
平常は鞘におさめて腰に帯び、突撃または接戦の場合、銃の先につけて敵を刺すのに用いる短い剣。また、それを先につけた銃（銃を背中に斜めに架けて、その先に丸出しの剣がついている）

※② 京城
日本が朝鮮を植民地支配していた時期の呼び方。李朝時代の王都・漢城を、1910（明治43）年の韓国併合により改称し、朝鮮総督府が置かれた。（現在のソウル）



も大勢行進して「サヨウナラ」と手を振って消え去りました。父は京城に残した母たちのことも心配し、父子5人で人の溢れる汽車に乗りました。掠奪などいろいろな目に遭いながら、遂に国境の安東で身動きできなくなりまし。同乗していた安東の方の家に泊めていただいたのですが、3ヶ月間どうにもならず父は奔走し、30人くらいの人を集め、ジャンク船(※③)を雇い、闇の中こっそり満州を脱出しました。3日くらいで南朝鮮の仁川に着く予定が、海が荒れ一週間波にもまれ、方角もわからなくなりました。食料もなく氷をかじって、皆船酔いも激しく衰弱しきって、見える所に上陸しました。北朝鮮の夢金浦という地で、在住の日本人は何軒かの民家に割り振りされ、私たちも収容されました。後で聞きましたが、反対岸は南朝鮮だったそうです。

それから三ヶ月間、大人も子どもも寒さと空腹に耐えいろいろな労働をさせられました。病人、乳児たちが何人も亡くなり、拾い集めた板で棺を作り、近くの砂山で火葬し、みんな泣いていました。

ある日、ソ連兵が視察に来て、父も含め男性を連行して行くのです。私たち子どもは父が頼りです。四人で父に取り縋って泣きました。すると、女性の将校(※④)が哀れに思ったのか、父だけ返してくれたのです。そして、帰国できるよう計らってくれ、京城までたどり着きました。21年の3月には、母も親戚の人も日本に引き揚げていました。訪ねた家で、前に親戚の家で働いていた韓国の方に会い、泊めてくださって、引揚船に乗るときは大きなおにぎりを持って送ってくれました。苦しい目に会いましたが、良い人たちにも巡り会えました。父の本籍地のある博多港に着き、母たちと、家族7人が会えました。

父はこの心労で病み、二年後の勤労感謝の日に、病院で朝眠るように逝きました。まだ、42歳でした。

世界中、戦争のない平和は来ないものでしょうか。私の願いです。

※③ジャンク舟
中国およびその周辺特有の舟の総称。
特定の舟の形式の舟ではない。

※④将校
軍隊で、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。「校」は木格(仕切り)。古代中国で、軍の指揮官が車の木格の中で号令をしたことからいう。

ついに「集団自決」を決意

堺市 関 晃 (82歳)

私は瀋陽（※①）の西250キロメートル、炭鉞（※②）の町「阜新」で終戦を迎えました。この直前、8月9日ソ連が宣戦布告し、北と西から国境を越えて攻め込んできました。15日の日本の降伏の翌日から汽車は通らなくなり、街は次第に不安な空気に包まれました。ソ連軍の到着とともに炭鉞労働者の暴動略奪が始まりました。危険を避けて独身寮に避難している社宅生活者の家財が持ち去られていくのを、ただ見ているほかありませんでした。そして、持ち去るものが尽きると、次第に身に迫る危険を感じて夜半、密かに一応鉄条網に囲まれている発電所構内へ避難しました。しかし、間もなくそこにも粗暴なソ連兵が入ってきて乱暴を働くようになり、ついに全員自決を決めねばならない状況になりました。その方法は高圧電気で感電死するといふものでした。発電所には、日本の敗戦によりもはや日本人でなくなった台湾出身の中国人の一人である電気技術者のSさんがいました。日本人に自殺をさせないため、密かに電力指令部署に電話をかけ、発電所方面を停電させる処置をとり、集団自殺はできなくなりました。

ちょうどその頃、ソ連軍警備司令部の車が発電所にやってきました。この事情を知り、発電所全体の警備を約束してくれて、全員の不安は解消しました。そして間もなく、満州の重工業設備を戦利品（※③）として持ち帰るため、ソ連工作部隊（※④）が到着しました。発電設備の解体撤去を全員が手伝うことになり、食料も支給されました。工事は10月に終わり、最後に貨車を貸してくれて、大連港へ避難できることになりました。この時、発電設備はなくなりましたが、変電設備は残っており、地域の電力を維持しなければ

※①瀋陽
中国遼寧省の省都。清朝の首都として盛京と改称し、北京遷都後は奉天と称した。



※②炭鉞
石炭を採掘する場所。立坑あるいは斜坑を掘って炭層に達し、炭層に沿って坑道を設けて掘り進む坑内掘りを普通とするが、阜新は露天掘りである。

※③戦利品
戦争でぶんどった品物。ぶんどり品、敵から押収または抑留すると同時に、所有権取得の効果認められる品物。

※④工作部隊
工事と作業を専門に移動する部隊。

ならないので、Sさんが自ら進んで残留を引き受けてくださいました。炭鉱の街の人々は、発電所の人間だけ逃げ出すのを知ってどれほど恨まれたことでしょう。運命かもしれません。日本人を乗せた貨物列車が発電所前を走り去るとき、Sさんは発電所の屋上から見えなくなるまで手を振っておられました。（Sさんは去年の春、米国カリフォルニアで84才の生涯を終えられました。）

大連では会社の厚意で、社員は避難民（※⑤）として転勤者として受け入れられ、苦しいながら生活できるようになりました。会社は昭和21年2月にソ連軍に接収（※⑥）され「長」の付く仕事にはソ連人が就きました。その秋、ソ連地区引揚が始まり、私も翌年2月に無事に長崎県佐世保港に帰ることができて、本当に幸運の連続でした。

なお、暴動の状況はパールバックの小説「大地」に書かれているそのままです。

原爆の落ちたあの日

長崎市 西山 ハツ子（享年73歳）

空襲がだんだんひどくなるので隣の和田さんの山で、城山に小屋を建て疎開の準備をし、近所4・5軒で始めることにしました。その日の朝、「日陰のうちに地ならしを」と思い気は焦るけど、空襲警報、解除、また空襲とくり返して防空壕を入ったり出たり。そうしているうちに時間は経つばかり。そこに、共同水道の料金の切符が来ました。払いに行く当番は、何日かうち近くの局に行けばいいことになっていたので、すぐ行ったけど「もうこれはここではだめ」と言われて、「たった今来たのに」とぶすぶす言いながら6つの哲治と、4つに足りない弘明を気にしながらも家に残して、その足で

※⑤ 避難民

戦争・戦闘などの危険から避難した人々。

※⑥ 接収

権力機関がその必要上、強制的に人民の所有物を収受すること。

役所まで行きました。その帰りの船で、いつものように窓際に座り、おっぱいを晴江に飲ませ、舟が出たら外を見せようと思っていた矢先、目に刺さるような光と、大きな音。舟は木の葉のように揺れるし、「爆弾だ。床に伏せろ」と男の大声。晴江に覆いかぶさるようにして伏せました。今度は「舟を出て防空壕にいけ」と言う声で、大波止の天井の薄い壕の中に入って、流れる汗と乱れる髪をかきあげたら、髪の毛はじりじりに焦げていました。窓の光を受けていた部分でした。壕の中で泣くやら騒ぐやらしているうちに「上の県庁まで火が回った。あぶない、早く逃げろ」と言います。気が付いてみると荷物はみんな舟の中。これではと思いい、舟に戻って晴江を帯でおんぶしようとなりました。ところが荷物は何もありません。仕方なく、大浦のグラバー邸の下の壕に入りました。その時、隣にいた人に「奥さんどちらですか？」と聞かれました。「平戸小屋（※①）」と言うと、「自分は飽の浦（※②）」。

と言つて「これからどうする？」と言うので、「日出町の親戚に知恵を借りに行こうかと思つている」と言つたら「私もついて行く」と言つて離れませんでした。溺れる者は藁をも掴むとはあの時のことかも。

腹は減るし、日は暮れる。爆音のする下を日出町の中尾の家まで行きました。おじさんが一人いて「皆、大山に疎開している」と言つて連れてきました。お婆さんは、話を聞いてさつそく食べられるものは何でもかき集めて、塩味をちよつとつけて、もちろん米粒なんでものは一粒も入ってはいない。そんな物を少しずつ分けて食べるのに、私には見たこともない押しかけのお客さんまでついてきたもんで、気の毒でたまらないでねー。そのうちおじさんが「大波止まで行ってきた」と言います。「今、造船の舟が来るから、その舟に乗らないともう帰れん」と言うので、それから出かけましたが、棧橋に着くまで爆音がすると物陰に隠れ、遠ざかれば走りながら、やっと舟に乗り、水の浦（※③）の棧橋に着いて目についたのが三菱造船の食堂が火の海ですが、誰も消すものもいません。燃えるがまま。辺りは瓦やガラスで足の

※①平戸小屋

長崎市平戸小屋町。爆心地より約2、5キロ。強制疎開先であった。

※②飽の浦

長崎市飽の浦町。平戸小屋町の約1キロ南の町。学校の体育館まで三菱長崎造船所の工場として使われていた。

※③水の浦

長崎市水の浦町。平戸小屋町と飽の浦町の間位置する。

踏み場もないくらい。心は家に帰っている。水の浦の石段をどうして上がったかわからない。気は焦るけど、足が震えて進まない。やっと着いてみると家はぺしやんこ。でも、七輪をおこす用意をして外に出してあるので、「ああ父ちゃんは無事だったなあ」と言いながら中に駆け込んでみると、弘明が包帯を巻かれて寝ていたので「母ちゃんが悪かった」と晴江は背に2人の子を両脇に思いつきり泣きました。後で話を聞くと、大波止の壕の中で、近所の西村さんの奥さんに会っていたので、そのことを教えてくれたそうで、大浦にでも行っているだろうと思つてあまり心配しなかつたそうだ。

これがその日1日の出来事。だけど、そこからがまた大変。この後が。もう、我家だけじゃあないから、この話やめとこう。

一度と見たくない「夢」

東大阪市 竹内 澄子（69歳）

昭和16年国民学校1年生。12月8日第二次大戦が始まる。翌2月、シンガポール陥落（※①）で、夜に提灯行列で街の中を歩く。今でもその灯りが目の前にちらつく。ラジオは朝から軍歌が流れ、勝利のニュースばかりの毎日。

4年生の始め、児童の疎開（※②）が始まり縁故（※③）、学童（※④）に分かれた。島根県のお寺だったが、私は病弱で残留組とされ、毎日6年生と同じ教室で勉強していた。12月に第二次疎開が始まり、私も参加することに。担任の先生や級友に会えると喜び、12月初旬の夕方、心配顔で見送っている母にも笑顔で電車の中から手を振っている私。長い夜汽車は疲れたが、翌朝一面銀世界の小さな駅に降り、迎えの級友たちの顔を見てほっとした。先生はすでに大阪に帰られたとのこと。一寸淋しい気もしながら、お寺まで歩いた。ちょうど昼食時、本堂に長い机が並び、その上のお茶碗を持った途

※①陥落
城や都市が攻め落とされること。

※②疎開
空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

※③縁故疎開
血縁・姻戚などの縁つづきを頼りに疎開先を選ぶこと。

※④学童疎開
太平洋戦争の末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校の児童を、農山村地域に集団的または個人的に移動させたこと。

端の地震に慌てて、裸足で境内に作られている畑に飛び出したことを覚えている。4年生の男女一緒、何人くらいいたのか覚えていないが、私はよく部屋のはしに布団をひいて寝ていた。昼は近くの学校まで、雪の中を歩いて通い、窓から入る雪を見ながら勉強。夜はみんな家で手紙を書いたりしたが、すべて先生に見てもらった。夕食時はいつも男の先生に詩吟を習い、今でもふつと口に出ることがある。お寺の裏のお墓のところで、歌の練習をして誕生会に歌ったりもした。

時々大阪から父兄が面会に。そのあとおみやげのおやつが配られた。時には酢昆布一枚の時もあったが、とてもおいしかった。また、地域の人からおにぎりやお芋のふかしたのが出るときもあり、うれしかった。不思議に忘れられないことは、ある日、疎開児童に天皇陛下からビスケットを賜ること。朝早く大きな荷車を引いて松江まで取りに行く級友を見送り、帰ってくるのを待ちわびた1日。そのビスケットは小さな箱に入っていた。すぐに食べていた人もいたが、私は大阪の母親に持って帰ってもらうことにして、6年卒業で大阪に帰る近くの人にこづけた。その頃大阪は毎日空襲が続いていて、無事に母の手に届いたのか戦後母と何年か暮らしたが聞くこともなく終わった。今、思い出すたびに、どんな味がしたのか気になる。

3月13日、滋賀県の祖母のお葬式で全員大阪を留守にしていた晩に、「大空襲で我家も全焼した」と父がすぐ迎えに来て、私の疎開生活は4カ月ほどで終わり、4月から滋賀県の学校に転校した。

戦前戦後の苦勞も知らず、幸せな方だったと思う。今、私の孫がちょうど4年生だ。本当にこんな時、あの生活をしていただろうかと夢でも見たような気もする。ただ、二度と夢にも見たくないと思っても、事実あったことは決して忘れてはいけない。再び繰り返さないためにも、私は書き残しておく必要があるのではないかと思われる。